

天文学への誘い いざな

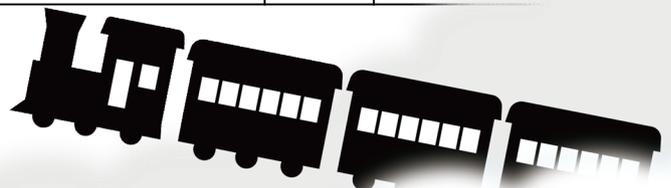
神山天文台や花山天文台をはじめとして、京都では天文学研究が盛んに行われています。
天文学の歴史は古く、日本に渡来したのは七世紀初めのこと。
陰陽道や仏教美術に残るほか、歴史書や貴族の日記には数々の天文異変が記録されています。
京都という場所や人文学的観点から天文学に関する資料を紹介します。

期間：1月6日(月)～3月11日(火) ※休室日を除く ☎資料課 075-723-4833



京都から天文を知る

No.	タイトル	編著者 発行者	出版年	請求記号 資料ID
1	京都大学大学院理学研究科附属天文台	京都大学大学院理学研究科 附属天文台	2022	開架 K1 442.1 Ky6 118028075
2	星をみつめて：京大花山天文台から /Gazing at stars : from Kwasan Observatory	花山宇宙文化財団編京都新聞 出版センター	2020	開架 K1 442.1 Ka99 118020503
3	星をみつめて：京大花山天文台から	京都新聞社	2019 -2020	書庫 K1 442.1 Ky6 118025949
4	黄華堂guide book：日本初!!観望会の地- 伏見-	「黄華堂」再発見プロジェクト実 行委員会	2016	開架 K17 442.3 091 110998897
5	京都千年天文学街道	作花一志著, 坂田肇, 青木成 一郎, 有賀雅夫著 花山星空ネットワーク京都千 年天文学街道ツアー事務局	2013	書庫 K1 440 Sa42 110984122
6	花山天文台80年のあゆみ：花山天文台 創立80周年記念誌	花山天文台80周年記念誌編 集委員会編集 京都大学大学院理学研究科 附属天文台	2009	開架 K1 442.1 Ky6 118015708
7	京の宇宙学：千年の伝統と京都大学が拓 く探査の未来	京都大学総合博物館「京の宇 宙学」企画展示実行委員会 編 花山星空ネットワーク	2008	開架 K1 440.4 Ky6 110966461
8	あすとろん：NPO法人花山星空ネットワー ク会報	花山星空ネットワーク	2007- 継続中	開架、書庫 アスト K





天文と歴史

No.	タイトル	編著者 発行者	出版年	請求記号 資料ID
9	仰ぎて天文を見る：江戸時代の天文学・暦学・星占い	彦根城博物館	2023	開架 440.21 H57 118032059
10	古墳と壁画の考古学：キトラ・高松塚古墳	泉武, 長谷川透著 法蔵館	2023	開架 210.32 I99 118036575
11	国立天文台所蔵貴重資料展示図録 2009-2022	国立天文台天文情報センター 暦計算室, 図書係編集 自然科学研究機構国立天文台	2023	開架 440.21 Ko49 118030870
12	長久保赤水の天文学	川口和彦著, 長久保赤水顕彰会編集 長久保赤水顕彰会	2021	書庫 440.21 N14 118023255
13	新陰陽道叢書, 第1巻 古代	細井浩志編 名著出版	2020	開架 148.4 H94 118019366
14	日本☆安部家天文道天文生名取春仲： 奥羽に残る春仲一門のレガシー：平成三 〇年度有備館夏季企画展	大崎市教育委員会文化財課	2018	書庫 148.8 O73 118007971
15	星を伝え歩いた男朝野北水：江戸時代の 星への興味	長野市立博物館	2017	書庫 440.2 N16 118003299
16	日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門	細井浩志著 吉川弘文館	2014	開架 449.81 H94 110990031
17	キトラ古墳壁画フォトマップ資料(奈良文化 財研究所史料；第86冊)	国立文化財機構奈良文化財 研究所	2011	書庫 210.32 N51 110974507
18	暦と天文の古代中世史	湯浅吉美著 吉川弘文館	2009	書庫 210.3 Y96 110966724
19	平安期技能官人における家業の継承：天 文道を中心として	高田義人著 國學院大學	2008	開架 K1 148.8 Ta28 110960150
20	古代の天文異変と史書	細井浩志著 吉川弘文館	2007	書庫 210.3 H94 110951992
21	若杉家文書『三家簿讚』の研究	大東文化大學東洋研究所	2004	書庫 440.22 D28 110916953
22	定家『明月記』の天文記録：古天文学によ る解釈	齊藤国治著 慶友社	1999	書庫 210.42 Sa25 110976359

23	太陽と月：古代人の宇宙観と死生観(日本民俗文化大系；2)	谷川健一著者代表 小学館	1983	書庫 Y 380.8 000417 110642190
----	------------------------------	-----------------	------	------------------------------------



天文と芸術

No.	タイトル	編著者 発行者	出版年	請求記号 資料ID
24	日・月・星：天文への祈りと武将のよそおい：特別展図録	仙台市博物館	2004	書庫 757 Se59 110933787
25	妙見菩薩と星曼荼羅(日本の美術；No.377)	林温 [編著] 至文堂	1997	書庫 702.1 N71 377 110574730
26	宮沢賢治の「夜」	宮沢賢治文, 畑沢基由写真 新潮社	1995	書庫 P 748 H42 110534755

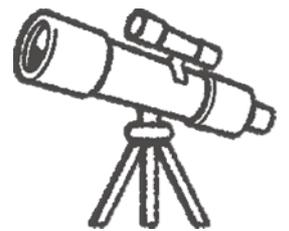
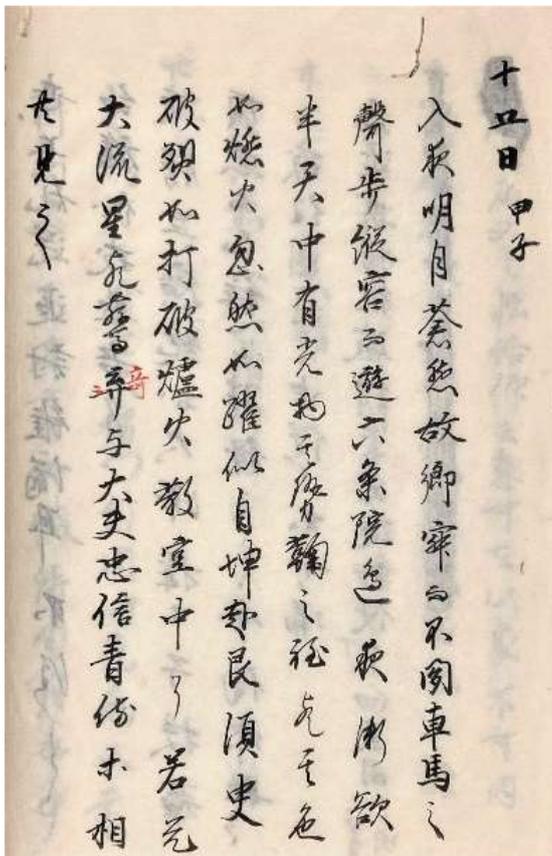
『明月記』にみる

藤原定家の 天体観測

『明月記』（すべて京都学・歴彩館蔵）

『明月記』とは、鎌倉時代の公家藤原定家の日記で、治承4（1180）年から嘉禎元（1235）年までの56年間の記録を記したものです。冷泉家時雨亭文庫に残る定家自筆本が、2000年国宝に、2019年日本天文遺産に認定されました。

定家は天文現象に強い関心を持っており、自分で観察した記録や陰陽師から聞いた過去の記録を『明月記』に残しています。『明月記』からは当時の人々が天文異変を見て驚き、恐れ、感嘆した様子を読み取ることができます。およそ1,000年前の人々の感情が、現代を生きる私たちにも新鮮に、あるいは身近に感じられることでしょう。



定家19歳、「大流星」を見る

治承4年（1180）9月15日条

『明月記』は治承4（1180）年2月から始まります。これは、定家を書いた初めての天文記録です。

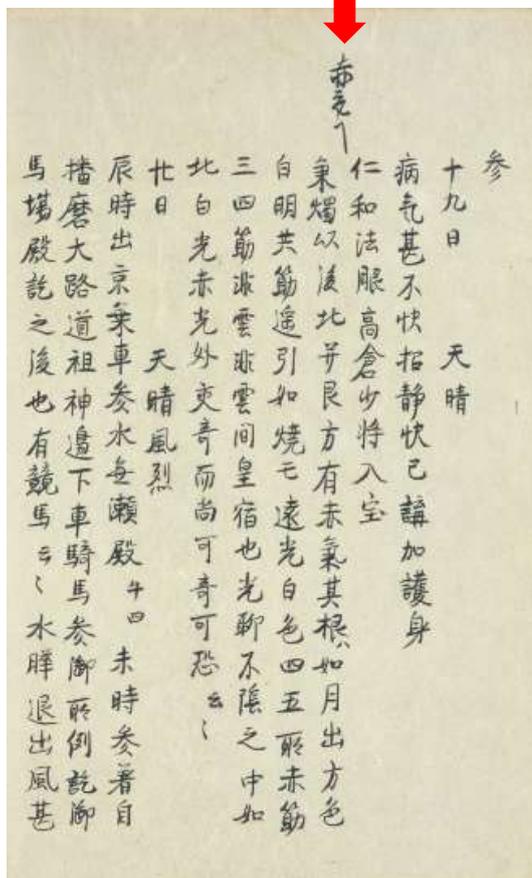
「故郷寂として」とは、同年5月に以仁王らの挙兵があり6月に福原京に遷都したことで、京都には人がいない寂しさが漂っていました。この年の9月15日（新暦10月5日）の満月の夜に、定家は鞠のように大きくて赤い火球が南西から北東に飛んでいくのを見て「驚奇」しました。「大流星のごとし」とありますが、燃える時の様子や規模の大きさから、流星というよりは隕石であると推測できます。

定家43歳、京都でオーロラを見る

元久元（1204）年正月19日条

「赤気」とは多くはオーロラのことを示しています。白と赤が混交する様子から「白気」とも呼ばれました。オーロラは、通常高緯度の極光帯で観測されますが、太陽活動が活発化し巨大な磁気嵐が起きることにより、日本の低緯度地域でも見る事ができます。昨年2024年5月にも石川県能登半島や京都府丹後地域で観測されました。

雲でもないし星でもない、空が赤や白で覆われる異様な現象に、定家は「奇にして尚奇とすべし。恐るべし」と述べています。同じオーロラを記録した『御室相承記』にも「希代の変なり」とあるように、オーロラは不吉な兆しと考えられていました。



「客星出現例」に残る

超新星爆発の記録

寛喜2（1230）年11月8日条

客星とは突然現れて消える星のことで、近代になってそれが新星や超新星などを示すことが分かりました。定家は、陰陽師安部泰俊から聞いた過去の天文異変を「客星出現例」として、寛喜2（1230）年11月8日条に列挙しています。

天喜2（1054）年4月（5月か）中旬以降、深夜1時から3時にかけて、觜参（オリオン座）のある東の空、天関星（おうし座ゼータ星）のあたりで明るく光る大きな星が観測されました。

これは現在かに星雲として残る超新星爆発の記録で、23日間にわたり昼間でも肉眼で見え、夜間は2年間も観測できたことが国内外の記録から分かっています。

